只見短歌会　令和五年三月詠草

嫁ぎ行く吾がため米と換へくれし鏡台は今も母と思へて　馬場　八智

束ね藁手櫛でほぐし苞（つと）を編む良き仕上がりと豆包み込む　目黒　富子

我が家（いえ）の傍らにある校庭の残雪の山春陽輝く　関谷登美子

通勤の車窓から見る高校生歩幅揃へて歩く青き春　立花　奏音

老い母の体重減少喜べど日に日に減れば不安になるも　新国由紀子

安らかな顔の浮かびし如月の真白き雪は亡母（はは）の面影　渡部ヨリ子

入退院繰り返しつつ日を過ごすわれの周りの視野は狭しも　故　新国　洋子（遺　作）

只見俳句会　三月定例会

日高俊平太　指導

春浅しわが影もなく息白く　紺　青

夕波のおと白梅の宿にいて

待ち望む独裁者なき春の夢　信

お雛様飾る侘しさ一人酒

薪棚をごっそり減らす二月尽　恒　夫

水仙のあふれて道を照らすかに

ランドセル背負いて見てる鏡前　都

浅春や野も里も色めざめざる

誰も居ぬ居間を灯せる余寒かな　礼

ひらひらとかな文字のごと春の雪

春きざし病後の夫に予定なし　味代子

受験生洋書の下のまんが本

今日よりは晩酌休むと炬燵夫　一　穂

入学前親子で歩く学校まで

押入れに祖母の作りしちゃんちゃんこ　真理子

夕餉時戸を開けしまま雪山を

腰痛を堪えし朝も寒波なり　修　一

浅雪となりて戦い終わりける

節分や親子で語る想い出話　睦　子

「お久しぶりね」友とかわす朝茶一杯